

古今集声点本における「名」のアクセント

秋 永 一 枝

まえがき

「古今集」の声点本の中には、姓・名・神名・地名のような、固有名詞に声点を注記した例が多くみられる。神名・地名に関しては、『古事記』本文三三例に付された上去の声の注が最も古く、『日本書紀』『古事記』『日本紀私記』『延喜式神名帳』『古語拾遺』の声点も平安から鎌倉にかけてのアクセント（以下⑦と略）資料として重要である。ともに地名は少ない。地名では『高山寺本和名類聚抄』『伊勢郷第七十四』に一九例、『前田家本色葉字類抄』『伊』の部「国郡付名所」に一四例の注記をみる。『古今集』における神名・地名も、以上の諸本との関連に於てとらえるべきであろう。

ところが、『色葉字類抄』は別として、右の諸本に於ては姓・名の注記を殆ど見ることができない。これはその性格上当然のことでもあろう。それにひきかえ『古今集』の声点本の中には、和語・字音語を問わず、姓・名、特に作者名に声点を注記した文献

が多くみられ、その注記例も他に例をみない程すこぶる多い。この現象は『古今集』の声点注記以前にはみられず、その後『後撰集』『百人一首』等に散見するのみで間もなくすたれてしまう。『四座講式』『補忘記』の字音語人名には声点がみられるが、和語の固有名詞は語例そのものが見られないようである。『平家正節』に至つてやっと多数の例が見られるが、これはまた変遷以後の⑦を示している。

古今集の声点本のうち、姓名、特に作者名に声点注記が多いことは、歌被講の形式から考えて当然のように思われる。順徳天皇『八雲御抄』「巻第二作法部」には歌被講の際の作法が事細かに記されており、「読師随重テ頗ウツフヤテ微音ニ一句ツツ読シ之。位署ハ如シ法微音也。」「官モ位モ始ヘ聞テ次第ニ読消様ニテ、惣公卿ヘ名ヘ不レ読。」（日本歌学大系三60ベ）の如く、こえの強弱にも意を用いている。そこまで作法がある時代であるから、固有名詞のよみ方が不明のものが論じられるのは当然で、清輔『袋草子』「一、諸集人名不審」の古今集の条には次の一名の作者が上げ

られるが、終の「小野小町」以外はそのよみに不審があるものである。

「源宗子」 源忠 源実 平中興 宮道深興 藤勝臣
難波万男 菅野忠臣 下野雄宗（注略） 龜ツツキ、或説
ヲウ、女房ノ名也。 小野小町（注略）（日本歌学大系二34頁）

右の作者名は小町を除いて『毘沙門堂本古今集註』など、後世の声点本に声点の注記がみられる。『袋草紙』『奥義抄』に声点の注記あるものはまだ管見せず、いわゆる清輔本の声点も清輔自身の注記とは定めがたい。顯昭の『古今集注・同序注』、伝顯昭筆『伏見宮家本古今集』の固有名詞には声点注記があり、特に『序注』には「神世七代者日本紀曰」として神名が列挙される。ここに声点の注記されたものをまだ見ないが、声点が注記された可能性は充分に考えられる。『毘沙門堂本古今集註』巻九の終に「神代事」として列挙される神名（第三巻の末）、巻廿の終に「作者百廿四人」として列挙される作者名（第六巻の末）はともに別伝の書き入れと思われるが、ここにおびただしい声点の注記が見られる。清輔・顯昭の学書から考えて六条家の歌学として神名・作者名の⑦を含めた読み方の伝授があったことが想像される。一方、二条家の定家の声点注記例は伊達家本の声点が全部で六五箇所一〇一文節と注記数が少なく、姓名では70人「さたのゝはる」（貞登）一例に過ぎない。面白いことに、「前田家本色葉字類抄」の「姓氏付」部には姓氏に声点注記のあるものは四例にすぎず、古今集の作者名と重複するのは「貞サタ」（下55才）一例であり、声点も一致すること、単なる偶然とも思われない。以後の声点本

は、例えば『寂恵本古今集加注』が、『永治二年本古今集（清輔本）』の声点を移点しているなど、校合が多くて個人の⑦を伝えるものとはいえない。とはいえ、固有名詞における中世の京都⑦をよく反映する資料が多く、『古今集延五記』などは、大きな⑦変化以後の室町⑦をも反映している。

そこでまず、固有名詞を和語と字音語に分類し、字音語は普通名詞とともに考察することにする。次に和語の固有名詞を「地名」「神名」「姓氏」「名」に分類する。「地名」と「神名」「姓氏」は分離して考察することは不可能である。そこで今回は「古今集」に特有な注記である「名」からまず検討してゆきたい。「名」とはほぼ同様な複合形態をもつ「姓氏」のみは、便宜上★を付して「名」の項で検討することにする。但しこの稿ではスペースの都合上四拍語以外は削除せざるを得なかったことをおことわりしておきたい。声点を引用する文献及びその略称を次に上げる。（尚、明らかに同系統の声点本の写しと思われるものは、一部校合の場合を除き、声点の同じものに限って省略名の頭に▲を付した。引用中、毘〔作者〕とあるのは、作者名一覧の箇所声点注記されているもの。（天恵・尊恵）等（ ）内に入れたものは⑦変遷以後の形を示す。尚「お・を・は」に限り、声点の右にその仮名を注記した。）

古今集

『教長註』・教長古今和歌集註（京都大学付属図書館蔵）

『顯府』・顯昭古今集序注（京都府立総合資料館蔵）

『顯天平』・平仮名本顯昭古今集注（天理図書館蔵）

『顯天片』・片仮名本顯昭古今集注(天理図書館蔵)

『顯大』・片仮名本顯昭古今集注(大東急記念文庫蔵)

『伏片』・伏見宮家本古今和歌集(宮内庁書陵部蔵)

『▲家』・家隆本古今和歌集(天理図書館蔵)

『永』・永治二年本古今和歌集(宮本長則氏蔵、複製日本古典文学館による)

『毘』・毘沙門堂本古今集註(某家蔵)

『▲高貞』・高松宮家貞応本古今和歌集(高松宮家蔵)

『京秘』・古今秘註抄(京都大学付属図書館蔵)

『問答』・古今問答(天理図書館蔵)

『訓』・古今訓点抄(某家蔵)

『寂』・寂庵本古今和歌集加注(上巻宮内庁書陵部、下巻上野淳一氏蔵)

『伊』・伊達家本古今和歌集(安藤柳司氏蔵)

『▲高嘉』・高松宮家嘉禄本古今和歌集(高松宮家蔵)

『▲京中』・中院本古今和歌集(京都大学付属図書館蔵)

『梅』・梅沢家本古今和歌集(梅沢記念館蔵)

『天恵』・堯恵本古今集開書一名延五記(天理図書館蔵)

『尊恵』・堯恵本古今集声句相伝開書(尊経閣文庫蔵)

『清閑』・古今私秘聞(ノートルダム清心女子大学正宗文庫蔵)

『清声』・古今私秘聞付頼阿真筆古今集声句点(右同)

『三秘』・三秘抄古今開書。片桐洋一翻刻「中世古今集注釈書解題一」による。

参考文献

『図本』|| 図書寮本・『観本』|| 観智院本・『高本』|| 高山寺本・

『前本』|| 前田家本・『伊本』|| 伊勢本・『東研』|| 東京大学国語研究室本

『和名』|| 和名類聚抄(馬淵和夫『和名類聚抄^{古写本}本文および索引』及び高山寺本は『^{天理}四座講式善本叢書』による。『名義』|| 類聚名義抄(図書寮本は勉誠社版に、観智院本・高山寺本(三宝物字集)は『^{天理}四座講式善本叢書』による。観智院本は上に「正宗本」のページ数を、下()内に「天理本」の丁数を示した。・

『色葉』色葉字類抄(中田祝夫・峯岸明『色葉字類抄研究並びに索引本文編』及び前田家本は「育徳財団複製本」による。)

『紀』|| 日本書紀(『図本神代紀』は「秘籍大観」による。・

『四座』|| 四座講式(金田一春彦『四座講式の研究』による。・

『補志』|| 補志記(貞享版・元禄版ともに白帝社複製による。・

『正節』|| 東京大学国語研究室蔵「平家正節」(金田一春彦氏の写真による)

四拍の名

四拍語は二・三拍語に比して相当法則的である。まず1転成語、

2特定の後部要素をもつ複合語に分類する。転成語は動詞・名詞から転じたもののみである。

1 転成語

(イ)動詞から転じたもの

「忠」^{はなこす} 上④上平 訓46人、上④上平 毘〔作者〕

動詞「ほどこす〔施〕」は、『因本・観本名義』『四座』ともに●○○注記。『毘』の去声は上声の誤写とみるので、『訓・毘』とも「名」は出自の動詞の○と一致する。動詞からの転成名はこの一例しかみられないが、恐らく「順」なども同型であろう。「あらはる・おもむく・いとなむ」など低起式の動詞からでた名前は思いつかないが、万一あれば「平平上平」○○○○型を選ぶだろう。

(口) 名詞から転じたもの

(i) 普通名詞から

「篋」

上上上上

毘 407人

○○上上

寂 335人

上上上平

訓 335人

『京本・前本和名十』『観本名義僧上 61(32オ)』はともに「上上上」であり、『毘・寂』は普通名詞の○と一致する。『訓』は人名に多い普通型を注記したものと思う。「竹」は「上上」、『群』は「群る」(「伏片・梅」上上平)が語源と思われるから「上上」で、法則的にも「上上上上」になるだろう。

「深養父」

平上上上

毘 79人

166人

378人

〔作者〕

(上上上上)

尊恵 129人

「深養父」は「深・蔽」からであろう。「深し」は二類○○○、「蔽」は一類●であるから複合法則にかなう。地名には「蔽」のつくものが各地に多く(「神・川・塚・田・波・原」等)、『日本地名大辞典』によれば、「養父」の地名は三河・知多・近江・但馬・肥前にみられる。『和名抄』には肥前・参河・但馬の「養父」には「也布・夜不」、『色葉字類抄』の肥前・但馬には

「養父」の注記がある。同じく『書言字考節用集』には「養父・養父」、『易林本節用集』には「養父」とあり、養ない父の「ヤウフ」と区別される。但し「姓」の「蔽」を「養父」とすることは意味合から避けたこと当然であろう。

『新漢和字典』によれば「父(ハ父親)」は呉音フ(上声)であり、「養」は隋唐音 *shai* (上声) である。藤堂明保氏によれば、唐代長安語の韻尾の *-i* は鼻にかかった長母音で *an* *v* *au* *v* *au* となつたそうであるから、「養父」を習得した日本人は恐らく *jaio* または *jaio* ●●●●? と発音したのであろう。「蔽」は当時 *shio* ●●●●『法華經單字』54ウ・『観本名義』僧上 14(8ウ)・古今集声点本諸本(上上上)であるから、殆ど同じような発音であり、地名「蔽」を表記するのに、二字の好字として「養父」を借りたことは間違いない。「深蔽」の語は文献で管見しないが、意味からすれば日常生活で存在し得る語彙であり、「名」とするに地名と同様の好字を用いたと考えられる。

(ii) 地名から

「みちのく」 992人

上平上上

毘 訓

当時の習慣として地名を女子名の呼び名とした例は多く、古今集でも「伊勢・因幡・讃岐・みちのく」があげられる。ここでは便宜上「地名」とあわせ考察したい。

地名の方は万葉集にすでに「美知乃久・美知能久」とあり、「みちのおく」の約とされるが、平安以降は古今集にも表われる「道の国」の約とも考えられていたようだ。「道」「国」は平安から現代まで一貫して一類●●であると考えられる。「奥」は『観本名義』

仏下末35(19オ)に〈平平〉の注記があるが『補忘』貞享版・元禄版ではともに「奥^ミ卷^{マキ}」(○○●●●●●●●●)、「奥^ミ疏^ス」(○○●●●●●●●●)と注記する。現代京都のは○○で、金田一氏は「沖」とともに類を決したい語とされた。「奥^ミ」は上代に多くオキ(ツ)形が多うされ、「沖」と同源である。ところが「沖」は『図本神代紀』で〈平平〉、「東研正節」で●○、現代京都で●●とこれまた不思議な変遷を示す。では、これらは古今集ではどうか。

「道」 上上 顯府(32) * (ゆきゝのゝに)、平○ 伏片^{上上}

(平^上ゆ^上平^上○平^上○) 738
たまはこのみち^上は

「奥^ミ」→「(みちの)おく」 平上

「沖」

沖(に) 1094 平^上 顯天片・顯大

沖干む(時) 466 平^上平^上平^上○ 高嘉・京中・清聞・清声

沖から 459 平^上平^上平^上 永・毘・寂・梅(訓^{ナキヒム})

平^上平^上平^上 伏片・家[▲]

平^上平^上 梅(しはあひ) 910

沖つ

平^上平^上 訓(波) 915

右によると「沖」の声点は〈平平〉が古い、鎌倉期には既に〈平平〉〈平上〉の両様であったようだ。466は隠詞が「熾火^ヒ」(上上)〔伏片・家〕「お」〔毘・京秘・訓・寂〕「を」であるから、〔訓〕の「ナキヒム」は「オキヒム」の誤写としか考えられない。『高嘉・京中』等定家本には〈平平平○〉の注記があるが

『伊』にはない。(『伊』『高嘉』とも字体は「れき」で同じ)。注記箇所から考えて『清聞・清声』は「高嘉」の声点の系統、『永・毘・寂・梅』は同一系統と思われる。尚、『古今和歌集成立論』の諸本にはナキヒムはないが、元永本・本阿弥切・筋切本・唐紙卷子本に「おきるん」とある。

「みちのく」

上上上平上(へ) 103 顯府

上上上平上(は) 1088 顯天片・顯大

上上○平上 1078 顯天片・顯大

上上平上(の) 677 毘・高貞

上上平○ 103 伏片・家[▲]

上上平上 992 人 毘・訓

上平○ 103 寂

上上平平(に) 628 毘・高貞

上上平平(の) 368 毘

(○○去○○の) 677 問答

「みちのくに」

上平○○○ 380 毘(へ)

右でいえることは、顯昭本系統は「道」を●とする。そのうちの「伏片」系は「の」を低く接続させ、「みち」が●である可能性を暗示する。「みちのく」の顯昭本へ上上平上(の)「の」は助詞「の」が低くつくというより、「の」の「おく」が縮約した形であるから「奥^ミ」の〈平平上〉から考えてあり得ない形ではない。「みちのく」の「く」の上声は、この語が「みちのおく」または「みちのくに」の約と考えて連語扱いであることを示している。『毘・訓・寂』等で「みち」に〈上平〉を注記しているのはなぜだろう

「奥」については長慶天皇の「仙源抄」の跋文が有名で、大野
晋氏・金田一氏・馬淵和夫氏・望月郁子氏にそれぞれ考察があ

型、龍神で○●▽型、田辺市で両型みられる。(若年層ではとも
に●○○▽型があらわれる。)現代東京の「奥」●○○は室町(京都)

沖

○ ○
○ ○

○ ○ ○
○ ○ ●

V
● ○
○ ●

● :
○ :

● ○
○ ●

2 特定の後部成素をもつもの

(イ)二拍十二拍、漢字二字の男子名(同様の複合をする姓を含む。
★印を付した)

これは平安以降の、最も名乗らしい型である。万葉集と勅撰集の作者部類を見渡しても、前者の男子名は漢字の字数も拍数も複合のしかたもまちまちであるのに比べ、後者のそれは二字四拍の名乗が圧倒的に多く、後部成素も時代が下るに従つて固定してゐる。古今集声点本ではその㊦も甚だ規則的で、前部成素の式を保存し、後部成素によつて固定した㊦の型を作っている。これらを見ると、古今集から平家正節の㊦へ、更に現代京都の㊦へと徐々に変化していったことが知られる。かつて榎垣実氏をして、四音の名の場合は、マサシゲ、ヨシエ「この二つの型が最も多いが、どんな場合に平板型になり、どんな場合に頭高型になるかは、結局よく分らない。非常に複雑なのだ。」（『京言葉』120頁）と嘆ぜしめた京都の祖形がここに明らかに浮かびだと言えよう。普通名詞よりも、前部成素の㊦の式保存の法則が強く作用し、かつ

後部成素の⑦の型によって特定の型を選ぶ。新しく複合した名乗もそれにならって同じ型となつてゆく。

このグループにあらわれた㊦の型は次の四種八類である。

$\triangleleft \square \square \text{上平} \triangleright \cdots A \triangleleft \text{上上上平} \triangleright a \triangleleft \text{平平上平} \triangleright$ (最も多い型)

$\begin{pmatrix} \square & \square \\ \text{上} & \text{上} \end{pmatrix} \cdots B \begin{pmatrix} \text{上} & \text{上} & \text{上} & \text{上} \end{pmatrix} b \begin{pmatrix} \text{平} & \text{平} & \text{上} & \text{上} \end{pmatrix}$ (やや多い型)

（やや少ない型）

[illegible]

今、全体の⑦型によって大きくわけ、それを更に後部成素の語によって分類し、語例の多いものに限り、前部成素の高起式・低起式によって上下に分けた表を作った。

表①前部成素の⑦

高起式をつくるもの（少）……高起式

是（惟）·友·宗·棟

赤し・篤し（敦・淳）

音

[illegible]

明・菱・券^{ちやう}・言^{こと}・寺・皮

大冬、黒・察シヤ・高・王タダ・忠・長・

正し(当)・易し(康)、定む(貞)?

○●
今・葛子中(仲)

秋・蔭(景)・春、経、利(敏)・良(淑)、有り・

興き・勝ち・兼ね

表②

(A) 型□□●○○△□□上平△となる傾向のもの

前部⑦

高起式△上上上平△A

低起式△上平上平△a

後部語

方

直

主

成

主

式・則・規

友則 上上上平 毘142人
○上上平 毘13人
○上上平 毘〔作者〕
○○○平 毘〔作者〕元規 平上上平 毘386人
○○上○ 毘〔作者〕
景式 ○○○○ 毘〔作者〕
尊惠 786人

房・平

仲平 平上上平 毘〔作者〕
忠房 平上上平 毘196人
○上上平 毘〔作者〕

望・茂

淑望 平上上平 毘251人
○○○平 毘〔作者〕
綾茂 平上上平 (三秘)

康・保

朝康 平上上平 毘225人
平上上○ 毘〔作者〕
貞保 平上上平 伏片225人
本康 平上上平 毘352人

梁

棟梁 上上上平 毘15人
243人
〔作者〕

行・子

篤行・敦行・淳行
上上上平 毘447人忠行 平上上平 毘680人・高
貞 680人益成 上上上平 毘413人
上上○○ 毘〔作者〕経成 平上上平 毘356人
(上平○○) 尊惠 10人
(上平上上) 天惠 10人
(三秘)黒主 上上上平 毘〔作者〕
○上上平 毘〔作者〕
・735人・
か・899人・〔作者〕是貞 上上上平 伏片193人
○○上○ 伏片189人
宗貞 上上上平 毘91人元方 平上上平 毘1人
○○○平 毘〔作者〕
(上上上○) 清閑 1人
定方 平上上平 毘231人
利貞 平上上平 毘136人
○○上○ 毘〔作者〕葛直 平上上平 永(墨点) 992人
人・寂 992人
言直 平上上平 (は) 伏片10人
人・家 10人
(も) 毘10人
・〔作者〕

惟幹 上上上平 毘〔作者〕

朝康 平上上平 毘225人
平上上○ 毘〔作者〕
貞保 平上上平 伏片225人
本康 平上上平 毘352人

訓 373 人	敏行 平平上平 毘 228 人
〇〇〇平 毘(平?)	望行 平平上平 毘 350 人・高
伊香()	貞 350 人
〔作者〕	平〇〇平 毘〔作者〕
宗子 ^{むねこ}	上上上平 毘() ^平
24 人	〇〇上平 毘〔作者〕

この(A)型が最も普通型である。後部成素に第二類●〇型が多いのも当然である。他の型をもつものでこの型にも発音されるものが相当みられることは、(A)型が名乗では最も普通な型ということができよう。いくつか異例はある。上段「伏片」が「棟梁」に「上上上平」とあるのは不審。「棟」は「上上」であり、「上上上平」とありたいところ。下段「伏片」が「朝康」に「上上上平」とあるのは、「朝」の⑦変遷以後の声点が、転記の際にまざれ込んだとすべきだろうか。

金田一氏によれば「朝」は第五類に含められ、*印(平安朝の文献でまだ例証されていない語)が付される。古今集では次の例があり、「拾遺集」にも例証があり、筆者は三類と考える。

あさの 〔平平〇〕 梅 622

あさに(けに)・あさに(ひに)・あさな(とも) 〔平平上〕 顕

大 376 *

あさな(あさな) 〔平平上……〕 伏片 1013・毘 16 513・高貞 513 訓

1013・梅 1013

あさことに 〔平平上〇〕・あさか平平上 浄弁本拾遺 61 364

確かに現代京都の⑦は〇●、東京の⑦は●で第五類と合致するが、現代京都の⑦でも複合名詞では第五類と異なり第三類と合う型をとるものが多い。これはその語の成立時期と関係するが、詳細は別稿にゆずる。『伏片』の他にも『天恵・尊恵・清閑』等の複合語に高起式が出ていることから、〇〇から●〇に変化したあとで、京都は〇●型になったものだろう。なぜ、「朝」の●〇型が保てなかったのか。「朝」は中世頃まで単独では用いられず、「あさま・あした」が用いられていた。その後、「あさ」が単独で使用される頃には、既に⑦の変化が起こり、⑦が不明になってしまった。そのため「あさ」を前部成素とした複合語の場合、その語が成立した時期によって⑦が異なる結果になる。ポリヴァノフは朝鮮語の「[ma, 2e, ma, 2e]」を「朝」の語源とし、京都の「朝」における「[下降的上昇は、消えた語末鼻音の反映と考えることができる]」としたが、古今集等の〇〇型を認めれば、語源を〇●型に求めることはできない相談だろう。

表③

(B) (b) 〇● 〔上上〕 となる傾向のもの

前部高起式 〔上上上上〕 B

―真「人真」上上上 毘 743 人・高貞 743 人、〇〇上 毘〔作者〕

〇〇上上 訓 743 人

―喬「惟喬」上上上上 毘 418

前部低起式 〔平平上上〕 b

―風「興風」平平上 毘 101 人・〔作者〕

平平上 訓 101 人

「春風」○平上上 昆〔作者〕

「良風」平平上④ 昆85人・《三秘 好風》、○○上④ 昆

〔作者〕

「有輔」平平上上 昆853人・高貞853人、○○上上 昆〔作者〕

「兼輔」平○○○ 昆417人

「有季」○○上上 昆〔作者〕

「有朋」平平上上 伏片66人・昆66人、○○上上 昆〔作者〕

「康秀」平平上④ 昆8人、○○上④ 昆〔作者〕

「貞文・定文」 平④上上 訓238人

「貞文・定文」 平④上上 昆〔作者〕

「さだふ」 平④上上 昆238人（「む」の無表記ととる）

「秋岑」平平上上 昆158人

「忠峯」平④上上 昆11人・258人、○○上上 昆〔作者〕

★「良岑」平平上上 昆91人

(b)型のうち、低起式のものが多く、四拍の高平型はあまり好まれなかったようである。他の型でも言えることだが、『昆』本はそれぞれの歌の位置におかれた作者名よりも、作者名のみをまとめて掲げた場合の方が、声点の省略が多い。この型では「人真・良風・有輔・有朋・康秀・忠峯」の場合、前部成素の漢字一字分の声点が省略されている。直前にその前部成素と同じ字の振仮名に声点が注記されていたから次のものは省略した、という方法ではない。前部成素をことさらに伝授せずとも、⑦が変遷する以前であれば、高起式か低起式か、方言を同じくする者の間では自明

のことであつた。後部成素の部分をとどの型に発音すればよいのか、それが問題であつた。

尚、〔作者〕の「平定文 九首」の（平④上上）は漢字音にひかれたものか。238には「平定文 サタフトヨムヘシ」とあり、当時、サタフンの撥音無表記形サタフから、読みとして撥音をおとした形が存在したことがしられ、⑦としては恐らく「訓」と同じ（平④上上）と思われる。『昆』では姓「文屋」でも「フムヤノ」、平④上上、225のように両様みられるが、ともに低起式で「梅」の「ふんや」と対立する。「ふみ」は「観本・高本名義」でへ上平、「ふみ」を前部成素とする複合語も高起式であり、古今集の「ふんつき」は「寂・訓・梅」ともに高起式である。『昆』のみ「フムヤ」が低起式なのは、漢字音「文」の平声（「観本名義」法下75（39オ）にも「文モム」と出）にひかれたもので、サタフムの（平④上上）も同様の結果と考える。尚、「良岑」は姓だが⑦は同じとみて、便宜上ここに収めた。

表④

①□□○○○ ~ □□○○○△□□上上△となる傾向のもの
前部低起式↓△平平上上△ c

(C1) ○○○○○か

「蔭」平④上上 昆430人、○○平④ 昆〔作者〕

「後蔭」平平上④ 頭大385・昆108人、○平上④ 伏片108人

「純」平平④上 昆12人、○○④去 昆〔作者〕

春「滋春」 〇〇平上
 平^④平上
 昆355人・372人・451人・862人・高貞862人、〇〇平去 昆〔作者〕
 清閑42人

(上上)〇〇

「時春」 平平平上

昆35人

「利春」 〇〇平去

昆〔作者〕

(C₂)
 〇〇〇〇●か
 松「なむ松」 平平平上 870。

永(墨圈)・寂(なんまつか) 平平平上^④
 頭註に「南松 浪松トモ」・訓(但し、ナムの下に句点あり。マツのみを人名ととるべきか)

平平〇〇

昆(ゝか)・高貞(ゝか)・京秘(ゝか)は列松とかけり

「浪松」 平平平上

教長注(浪松)の片仮名に声点注記

「盛」 平^④平上

昆927人、平^④平去 昆〔作者〕

「大類」 平平平上

昆591人・978、高貞591人、平平平去 昆〔作者〕、〇平平上 訓591人

(C₂)
 (C₂)型か(前部高起式)へ上上上上(C₂か)

「鷹」 上上上上

頭府^③ (昆 ひとまろか^④ 135)

「仲鷹」 なかまろ

平平平上 昆406人

(なかまろ

平上上上 訓406人

平上平上

尊恵406人

C₁ C₂と同じ後部成素をもつ高起式の例が見られないのが残念である。「蔭・春・純」は〇●型で、内部に高い部分を持つために

●□〇〇●という二か所高い部分をもつ型はつくれないが、●●●型は可能である。しかし、このような型は好まれなかったものだろうか。後部成素〇●型の類は前部成素が高起式であれば「人鷹」のように(C₂)型になったのではなかろうか。「仲鷹」の「昆」の「平平平上」の声点から想像してこれを(C)型に含めた。「訓」の「平上上上」型は「中」の〇●型の影響であろうが、人名には他に例がないためこれで一つの型をもうけることはしなかった。

表⑤

前部⑦		後部⑧	
高	起	高	起
式↓	式↓	式↓	式↓
人 赤人 上上上上 寂(墨圈) 尊恵 ^④ 上上上上 梅 ^④ 上上上上 天恵 ^④ 〇〇上上 寂 ^④	勝臣 ^{かみ} 平平上上 お昆255人 忠臣 ^{ただ} 平 ^④ 上上 昆809人・高 貞809人 〇〇上上 昆〔作者〕 訓809人 中臣 ^{なかつ} 平 ^④ 去〇	勝臣 ^{かみ} 平平上上 平平上上 昆472人・〔作者〕永(ん)・墨圈)・(三秘 勝遠)	

以上分類したように、前部成素の⑦の式保存の法則は、まことに強固であった。では後部成素はどうかというところ、語源の不明なものもあり、全体の⑦型の例外もあるが、凡そ次のようになろう。但し、(d)型は不要かもしれない。(＊印は二つ以上の⑦型が現れたもの。)(c)型と同じ後部成素の語をもち、前部成素が高起式の語例が殆どない。後部成素が低起式のもの、前部成素も低起式のもの、と結びつき易い、ということが言えれば簡単だが、そうはいかないように思う。

表⑦

(A) (a) 〈□□上平〉をつくるもの (最も多)

前部高起式↓〈上上上上〉 前部低起式↓〈平平上平〉

● 方・貞?・則・規・式・人・平?

○ 臣・房・望・茂?・幹(八本)、康・保、貞(八定む)?

● 道・岳

○ 主・梁

(b) (b) 〈□□上上〉をつくるもの (やや多)

前部高起式↓〈上上上上〉 前部低起式↓〈平平上上〉

● 風・輔 (八助・楹柱)・季(八末)・朋(八友)・唐(八九)・

道・峰・岑・岳

○ 臣・真(八核)?・高・喬

● 秀・向

(c) 〈□□上上〉をつくるもの (やや少ない)

前部低起式↓〈平平上上〉 (前部高起式は〈上上上上〉か)

○ 蔭・春、純 (八清) (全体の型は○○○●か)

○ 松
● 風・磨(八丸)?・道
● 盛・頼(八由)
(d) (d) 〈□□上平〉をつくるもの (ごく稀)
前部高起式↓〈上上上上〉 前部低起式↓〈平平上平〉
● 岳 (全体の⑦型というより、前部・後部の語の⑦をそれぞれ示したものか)
○ 文

右のように分類してみると、傾向として次のことがいえそうである。

① 後部成素が●○型(下降型)のものは、その⑦を生かして□□○型になることが多い。この場合、前部成素が高起式ならば●●○、低起式ならば○○○●となる。

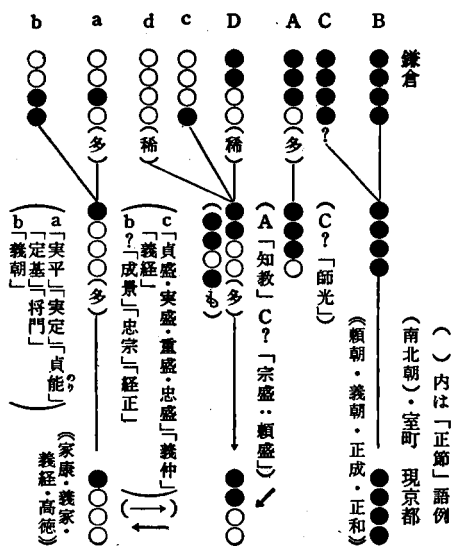
② 後部成素が●●型(高平型)のものは、その⑦の型を生かして□□●●型になることが多い。この場合、前部成素が高起式ならば●●●●、低起式ならば○○○●となる。

③ 後部成素が○●型(昇降型・上昇型)で前部成素が低起式のもの、後部成素の⑦を生かして○○○●型・○○○●型になることが多い。

④ 後部成素が○○○型(低平型)のものは、多数型□□●●型、後部平ら型のいずれになることが多い。

(口) 三拍十一拍の名

男子名としては「万雄」の一例のみ、女子名では「あまねこ」「なはいこ」の二例のみである。「万」は○○●型であるから前部成素の⑦を生かした安定型となる。「あまねこ」も「あまねし」



も)であり、変遷後は●○○で合致する。「忠宗」は法則的に○○●●●●V●○○○型となりそうなのだが、うまく合わない。「経正」は○○●●○○であるが、同じ後部成分がなく、どのグループに入るか不明。

「正節」で●○○○型のもは、鎌倉は殆ど○○○○型である。前部後部要素に上述しなかった「将門」も、マサシは○○●、カドは●○○で○○○型になるはずであるし、「義朝」は○○●●型であらうから、変遷後はともに●○○○型になってよい。

同様にして現京都の「家康」は「家」鎌倉○○○（▽室町●●）、「康し」鎌倉○○○（▽室町●●）で、鎌倉c型○○○●●、室

町以後●○○となる。「義家」「高德」も同様の変遷をたどる。「頼朝」は鎌倉で「頼」は高起式、「朝」はB型を作る後部要素であるから、鎌倉以後●●●型で合致する。要は、その語がいつ作られたか、そのグループが多数型か否かにあるわけである。室町以後の変遷については、方言⑦もふくめて別途考察したいと思う。

注(1) 金田一春彦『国語アクトの史的研究』65ページ

(2) 元永本の語頭以外のハ行の仮名がハ行転呼によってワ行で書かれることが多いこと、既に西下経一氏『古今集の伝本の研究』(322べ)に詳しい。特に「ひ」を「ゐ」とするもの。の」の例が多く、「ちりゐぢ・ついゐぢ・にほゐ・山のかゐ(峽・かゐ(貝)・つゐに・よゐ・ゐむ(干)・やまゐ」等二七語が上げられている。「おきゐん」とあることは、書写の人が「おきひむ」を一語とみたものであらう。

(3) 「しはらくいろはをつねによむやうにて声をさくらはお
文字は去声なるへし 定家かお文字つかふへき事をかくに
山のおくとかけり まことに去声とおほゆるを おく山と
うちかへしていへは 去声にはよまれず 上声に転する
也」(応永本。源氏物語大成七 648p)

(4) 大野晋『仮名遣の起源について』(国語と国文学二七の一
二、S 25・12)

大野氏によれば長慶天皇は興國四年(1342)出生、南朝で生育、仙源抄執筆は吉野朝の末弘和初年(1381)頃とされる。

(5) 金田一春彦『国語アクセントの史的研究原理と方法』199べく

- (6) 馬淵和夫『定家かなづかいと契沖かなづかい』(続日本
文法講座2 132べ)
- (7) 望月郁子『仙源抄』跋文の語調標示の方法とその発想—
覚え書き—(常葉女子短大紀要五、昭48・3)
- (8) 田辺佳代『古今集延五記における音韻及び表記に関する
研究』(S52・3卒業論文)
- (9) 語例所在の巻・ページ・行を掲げる。「別44・6 十一29
—10、30—9・12、41—4、十四6—11」(秋永一枝・田辺
佳代翻刻『古今集延五記』天理
圖書館蔵)
- (10) 「沖」の東京〇は現在〇●型だが、明治以来次のように

* 本誌66集(昭53・10)掲載の上野和昭「国語におけるマ行音
バ行音交替現象について」に左記の校正上の誤りがありました
ので、おわびして訂正いたします。

(誤)

(正)

77頁上14行 Mamoriacaxi, ju, aita Mamoriacaxi, ju, aita

78頁下9行 飯オモムキ

飯オモムキ

13行 歸ヲモムキを

歸ヲモムキを

79頁上7行 趣ムキ

趣ムキ

- 不安定であった。●(美妙「日本大辞書」)、○●「(三宅
「新辞海」)、○●(神保・常深「国語発音アクセント辞典」)
- (11) 金田一春彦『国語アクセントの史的研究 原理と方法』(64
べ)
- (12) ポリワールノフ『日本語研究』村山七郎編訳35べ等。尚、
金田一春彦『国語アクセントの史的研究』128べに紹介があ
る。
- (13) 『時代別国語大辞典 上代編』による。
- (14) 金田一春彦『平安朝日本語復元による朗読 紫式部源氏
物語』の解説「アクセントの部」による。

81頁上23行 カマミシ

カマミシ

* 同じく66集掲載の秋永一枝
田辺佳代『古今集延五記天理
圖書館蔵』の新刊紹介
中に左記の誤りがありましたので、おわびして訂正いたしま
す。

113頁上2行

(誤) 自筆本

(正) 堯患のものとと思われる署名・花押のある
本。